



江健三郎

ランナー調書

新潮社



ピンチランナー調書 ちようしよ

一九七六年一〇月二〇日発行
一九七六年一月二五日三刷

著者 大江健三郎 おおい けんざぶろう

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一一
編集部(03)二六六―五四一一

振替 東京四―八〇八

株式会社光邦 新宿加藤製本

定価 一〇〇円



© Kenzaburō Ōe
Printed in Japan 1976

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ピンチランナー調書 目次

第一章	戦後草野球の黄金時代	7
第二章	ゴースト・ライター 幻の書き手が起用される	52
第三章	しかしそれらは過去のことだ	84
第四章	すぐに闘いのなかへ入った	111
第五章	隠謀から疎外されたと感じる	144
第六章	「大物A氏」すなわち「 バトロソ 親方」とこのようにして出会った	178
第七章	バトロソ 「親方」の多面的研究	205
第八章	続「 バトロソ 親方」の多面的研究	236
第九章	「転換」二人組が未来を分析する	268
第十章	「ヤマメ軍団」オデューッセイア	291
第十一章	道化集団の上京	323
第十二章	「転換」二人組、相争う	345

装
幀
公
司
修

ピンチランナー調書

第一章 戦後草野球の黄金時代



1

他人の言葉にちがいない、それを他人が発した状況も覚えて
いるのに、あれこそは自分の魂の深奥から出た言葉だと感じら
れる言葉。もっとも言葉がふたりの人間の関係の場に成立する以上、自分の存在こそ、他人の言
葉の真の源泉たることを主張しえぬはずはない。ある時、原子力発電所のもと技師で、僕とは反
撥しあっていたひとりの男が、僕に聞かせることをもくろんで、ひとりごとのようにこういった。
——ピンチランナーに選ばれるほど恐しく、また胸が野望に湧きたつことはなかった！ あれ
は草野球の受難だ。いまあの子供らは、ピンチランナーに呼びかけないが、たとえこのような場
合にもおそらく……

——そうだ、リー、リーという声でけしかけられない場合にも！
僕は相槌をうった。そしてそれは、相槌以上のものであった。もと技師によってその言葉が発
せられ、僕がそれに応えた瞬間われわれの間には、かならずしも共感と単純化するわけにはゆか

ぬが、肉親のきずなのようにねじれてやっかいな熱いパイプがとおったのだ。まず具体的にわれわれは、お互いが同年あるいは一、二年の差の真の同世代であることを認知しあったわけだった。それまで互いにあきらかであったのは、年齢のわかりにくいかれと僕とが、東京大学の理学部と文学部をそれぞれ卒業したということのみで、それはむしろさきにいった漠然たる反撥の種子だった。

なぜ同世代か？ リー、リーの声という僕の応答がかれにすぐさま理解され、僕にはピンチランナーの受難という言葉が、魂の声として自覚されたからだ。そのままわれわれは春の終りの陽ざしのなかで沈黙し、内臓の奥を鞭うって鳴りわたるリー、リー、リーの声に聞きいった。

正午近くのグラウンドでは、われわれの子供らとはちがう子供らが、まったく声をあげずに野球をしていた。グラウンドを囲む校舎で授業を受けている者たちのことを配慮して。かれらは体育の授業など真の授業とみなしていない、エリート志願の小秀才たちなのだ。かれらはすでに肉体の内部からつきあげてくる運動の喜びなど声にあらわす者らではない。原始的な肉体感情、どうしてそうしたものを制禦することもできずにキャーキャー騒いでいられよう？ かれらは外部に管理され、内部を管理しうる者となるべき小秀才なのに。突然の奇声は、われわれの子供らの教室からやってくる。僕もあの男も、グラウンドの静肅な子供らの、しかも運動機能にすぐれた見まがいえぬ知的敏捷を、われわれの子供らがいまにも叫びたてぬかと惧れつつ遺恨の心で見まもっていたのだ。

——もともとおれなどは、ピンチランナーとして試合に出るよりほかはなかったんだがな。おれにはグローヴがなかったから。

——わかった、と僕は答えた。戦後草野球の黄金時代、ブームの過熱と裏腹に、地方の子供ら

でグローブを持っている者は数少なかった。僕の集落の場合、僥倖にもグローブとミットで九箇そろっていたが、それらのいちいち正選手の個人的所有であった。闇ルートでグローブを工面してもらった子供のみが、正選手の資格をかちとった。僕は布で造ったグローブを恥かしげに隠しつつ外野を走り、正選手の後逸する球を拾った。やはり正選手の個人的所有であるボールを紛失からまもるためにのみ、練習に参加させてもらったのである。

——おれはいまでもな、隣りの新制中学チームが来た試合での昂奮と恐怖を忘れないよ。結局はひとりで生きてゆかねばならぬ現実世界への、そもその決意もな。脂肪なんかすこしもない臍のまわりから、痛い震えが湧きおこる具合まで覚えてるよ。そして頭の芯には、リー、リー、リーさ。それもはじめのうちから大差がつけば、ピンチランナー待機の苦しみはない。しかしそれは勝っていても負けていても、ベンチのおれに無味乾燥のゲームでね。むしろゲームでもなんでもなかった。一点差の九回裏、あるいはおなじく一点差の延長戦の裏、そんな危機をはらんでいるのこそ、本当のゲームだろう？ 九回裏、一点差で正選手がヒットを打つ、そしてベンチ要員の受難だ。監督は復員してきたままブラブラしている素封家の次男だったがね、そいつは相手チームの監督に野球知識をひけらかそうと、それもあいつは理論といったがね、h a、h a、すぐさま小手先の技巧をこらしてみせる。ピンチランナーの起用。おれの登場さ。もしおれが臂力すぐれた名手なら、当の打席でピンチヒッターに起用されていたはずだろう？ おれはただずつとベンチに、教師に内緒で教室から運び出した二人掛けの木椅子に坐っていただけの、凡庸な補欠なんだよ。足はつかれていないにしてもさ。そのおれが、なにはともあれ元気をだしてファースト・ベースへ駆けて行く。足が早いやつだと思わせようと腿を高くあげたりしてさ。おれと交替するやつは、もう三角眼をしている。なぜだ？ やつとのことヒットを打ったそいつが、鈍

足のおれに檜舞台ひのまをとってかわられてしまうから。おれが盗塁に失敗すれば、自分のヒットを台なしにされたといつて、そいつはいつまでも厭味いらいをいうよ、アア、アーと嘆息しては！ 逆に盗塁に成功し、ヒット・エンド・ランまでうまく行って、おれが同点ランナーになる。そのまま試合が延長されるということになるとするね？ わずかな間にしろ、おれはヒーローになるわけだし、延長戦のつづく間、そいつはおれにグロウを貸さねばならない。あらかじめの三角眼も当然だよ。しかもなおおれは、ピンチランナーとして塁に立つ。そのとたんにな、味方チームの全員が、あの三角眼のやつまでもが、リー、リー、リーの大喚声だ。リードせよ、もっとリードせよ、そして果敢に盗塁せよ！ と叫んでいるわけね。塁から二メートル離れ、ピッチャーを見張っているだけでは裏切りだと告発するように。リー、リー、リーという叫び声のシャワーをあびて、熱い頭はジンジン鳴ってる。自分の脚力と決意の問題、ピッチャーの動きにあわせて、そいつをはつきりさせねばならぬが、眼が廻りそうでまったくそれどころの話じゃないんだよ。ピッチャーは狡うそがしこそうだし、キャッチャーはいかにも強い肩のようだし、『野球少年』のグラヴィアの土井垣武そっくりにかまえてさ！ ふだんならそいつの気どりを笑っただろう、時にはいかなる都会っ子よりもすれっからの村のガキらしく。しかしいまやおれは単純に威嚇いかくされているだけなのさ。駈けだすか、じっとしているか、それにしてもいくらかのリードは？ 猶予もあらばこそ、熱い頭と縮んだ手足を、リー、リー、リーの催促の嵐。恐怖しているそのおれに、盗塁をうまくやりたいという、うら悲しい野望もあってさ……

かれが実際このように多くの言葉を発したのだったか？ ピンチランナーほど苦しく、また野望に湧きたつ切ない立場はなかったな、といったのみであったかもしれない。しかしかれの魂が表現をもとめて身もだえしていた内容は、確かにこのとおりであったと思う。僕の魂がまるごと

それを聴きとったのである。そのあげくわれわれは沈黙し、戦後すぐの新制中学のとは似ても似つかぬ、立派なグラウンドの隅に立って、ああすでに四半世紀前、火照りに火照った頭の熱の照りかえしにおそわれていたわけだ。励ましとも呪咀ともつかぬ、あのリー、リー、リーという声を幻に聞きながら。

その時、われわれの脇には、おなじくわれわれの子供ら wait している母親たちが幾人かいた。そのなかのまた幾たりかは酒場やキャバレーに仕事をしにゆく人びとで、朝になっても彼女らが酒臭いこともあった。その結婚生活を破壊し、かならずしもその年齢が適当というのではない職種につくことを、余儀なくさせた事情。そこにはやはりわれわれの子供らの、ということがあるはずだった故に、われわれはあまり会話をかわさず、相手の視線をとらえるような、とらえぬようなあいまいさで会釈をかわし、そしてたいていは沈黙して、われわれの子供らとはちがう子供らをグラウンドに眺めて時をすごしたのであった。

そしてついにわれわれの子供らが教室から現れて、こちらへ進んでくる。教室から遠くグラウンドの反対側で、われわれ父母たちが待つ規則である。一列になったわれわれの子供らは、まことにゆっくりと進んでくる。われわれの子供らとはちがう子供らが野球をつづけるグラウンドの端をたどりつつ、頭部をまもる両手をかざしてやってくる。それは幼ない投降者たちのようだ。もともと頭部をまもるためのその動作は、ともに、頭蓋骨の欠損をプラスチックで覆っている僕の子供と、いましがた僕と話したもと技師の子供と二人のために教師が指示したのである。ところろがそれはダウン氏症や脳性小児麻痺の子供たちにもまた、必要な指示と受けとめられた。両手を不揃いにかざしつつ、われわれの子供らはなおもゆっくりとやってくる。待ち受けているわれわれの所へついにかれらがたどりつく時には、さきほどまで野球をしていたわれわれの子供らと

は、ちがう子供らは、グラウンドを竹帚で掃いている。その濛々たる砂埃りのなかを、たいていは弱視の眼を半眼にひらき、懸命に前を見つめ歩幅の狭い内股で、われわれの子供らがやってくる。子供らの胸の、住所・電話番号を書いた名札には、その保護者の名も書きつけてあるのだが、逆にわれわれ父母たちは子供らの名前を認識の手だてとした。たとえば僕が、光・父であり、原子力発電所のもと技師が森・父であるというように。はじめから僕は森・父のその息子の名前に、気がかりなものを感じとっていたのだが、ついにその名の由来をたずねることはなかった。森・父が、僕の息子の光という名の由来を、たずねなかったのと同様に。

しかし森・父は、教師たちとの話合いの席で、自分の息子の出生の際にインターンの若僧が、この子供に視力はいえぬと保障したと、いつまでも新しい遺恨をこめていったことがあった。それなら、まったく同じ部位に頭蓋骨欠損があった僕の息子の、その命名に際しての心理構造を見抜かなかったことはあるまい。僕は誕生と緊急手術の騒動の間に出生届を遅らせて、始末書をもってでかけて行った区役所での、ラテン語の死・白痴と音でつながる森という名を思いついた退廃の一瞬を思い出していたのだが……

われわれの子供らは、われわれの待ちうけている場所まで辿りつく、それまで一隊を組んでいたお互いの存在をたちまち忘れ去ったし、われわれもまた、父母同士への関心を一挙に失ってしまう。そしてわれわれは自分の子供をのみ意識した堅固な二人組となり、グラウンドの隅の待機場所を離れるのだ。それは僕と森・父とが、ピンチランナーについてそれぞれの赤裸の魂がはなつ微光を見たようであった日にもまたかわることはなかった。

はじめ森・父は、僕と共感の道を開くよりは、明確な敵意の印象をあらわすためにのみ話しかけてきたのである。その前の学期から息子を迎えに行っていた僕に、森・父としてはじめてその息子を迎えにきたのであった四月のある朝、かれは無闇に挑戦的なふうでこういった。

——おれは外国の研究所にいたことがあるけれどもな、きみのような歯をしている人間は、それだけで、ある出身階層を示したね。

そして森・父は自分のくつきりしすぎているほどの歯ならびを剥きだすと、かたちの良いことには疑いないが幼なすぎる脣を両端にひきつけて、いやが上にもその歯の見事さを強調した。

——確かに僕の歯は僕の階層を示しているよ、とくに時間にかかわって。それは戦中・戦後の食糧難の時期に少年だった者の階層をあらわしているのさ。それはわれわれの年代の全体を覆っているのじゃないか？

森・父はやはり大人になった者には幼なすぎる、つぶらで湿っている眼を斜視にして、ちょっとの間考え込んでいた。それからあっさり挑戦を中止すると、

——そうだね、そういうええ、といったのであった。

森・父が僕に挑戦したのは、その朝かれがグラウンドに作戦を指揮する將軍のように立っているのを見かねて、特殊学級の子供らの父母待機所を教えてやった僕へ報復しようとしたのだ。僕は寛大な人間でないが、その朝は腹を立てることもなかった。われわれの子供らのひとりをつれて通勤ラッシュのバスに乗り歩道橋の段々を昇り下りし、やっと小学校までたどりつく。そして

不安のなかの子供を他人にゆだねねばならない。はじめてその経験をした父親が他者の世界すべてにむけて攻撃的になることは、自然な現象だったから。しかも僕がその経験をかさねたヴェテランである以上……

僕はとくに理由もなく森・父を前衛音楽家ではないかと考えた。オリヴィエ・メシアンをひけば世界一のピアニストであり、その当時わが国で「ハッピーニング」などという見世物を企画・上演する常連でもあった高橋悠治に、森・父は実際よく似ていたから。もちろん僕は森・父を高橋悠治から区別していたにもかかわらず、やはりかれをもまた前衛音楽家であるように感じていたのだ。

その翌日は森・父のかわりに母親が、すなわち森・母が来た。朝の子供の受け渡しの時、彼女は教師に事情を説明していた。くすんだ黒のワンピースを着て、インディオのように見える小柄な森・母は、すべての送り迎えの母親が教師と話す順番を待っているにもかかわらず、自分にはとくにいわねばならぬことがあり、それは決して他人に機会をゆずっていわずにすますことのできるものではなく、それもそのまると全体をいわねばならぬのだと思いつめているようだった。じつはそれもあらゆる母親がここで示す態度だったのだ。しかしこの黒眼がちの小柄な女には、その態度をほとんど美しく感じさせる迫力があつたのだ。その日も夫が送り迎えするはずで子供はそれを期待していたから、かならずしも母親を忌避しているのではないけれども、期待にしがって展開される心の動きをさえぎられてかれは不安にちがいない。迎えの時間までに期待のむきをかえてやることはできないだろうか？ 夫は歯槽膿漏（せうろうろう）の前歯をいま治療しているが、仮の義歯を壊してしまつて、今朝はひとまえに出たがらない……

そのまた翌朝、応急処置の間にあつた義歯をつけてきた森・父は、僕を見かけると悪びれずに